

第31回 郷土の先賢顕彰者紹介

3階 郷土先賢室



カニかご漁法の開発者

はまだ とらまつ
浜多 虎松 (1916~1966)

浜多虎松は、大正5年(1916)4月27日、魚津町下新町(現 魚津市本町)に浜多駒次郎の次男として生まれた。富山県水産講習所(現滑川高校海洋科)卒業後、親族の漁業活動に協力するため、台湾・朝鮮で漁業に従事した。戦後は、日本に帰国し、地元で底引き網やサケ・マス流し網漁業に従事し、後に小型定置網を兄と経営していた。

ベニズワイガニは、俗称「立山カニ」と称されていたカニで、富山湾や能登半島及び新潟県沖合の深海に生息しており、刺網漁業によってわずかな数量が捕獲されていた。しかし、刺網漁法は、漁による網の損傷が大きく、修理に多大の労力と時間を要した。また、網にからまったカニの取り外し作業にも時間がかかり、その間の鮮度保持に大変苦労していた。

カニ漁の盛んな魚津地区の漁業青年研究会員だった虎松は、これらの問題を解決するため、新規漁具漁法の開発に努めた。当時、虎松は、かご漁法によって磯辺のカニを採捕していたことから、この方法を改良することによって、問題を解消できないかと考えた。だが、周囲からは、「深海のカニもかごに入るだろうか?」「大型のかごに海底の泥が詰まったら、とても引き揚げられるものではない」など疑問の声が多かった。しかし、日本海区水産研究所所長の内橋潔にも後押しされ、竹製のかごを発注し、いよいよ実地試験に向けて動き出した。

虎松は、かごの編み目を大きくすることで泥詰まりの問題を解決するだけでなく、資源保護の立場から、雌ガニや小型の雄ガニがかごから抜け出せるようにした。そして、昭和36年(1961)3月に初めて試験操業を実施。魚津市沖北東の水深500mにカニかごを10個投げ入れた。期待と不安があったが、かごを引き揚げた際、かごの底部がベニズワイガニで真っ赤に見えたという。合計220尾の雄ガニ(雌ガニは0尾)を捕獲するという成功をおさめた。

その後、魚津を中心にベニズワイガニのかご漁法が急速に普及した。昭和37年(1962)9月に、自由漁業であったカニかご漁法は資源保護及び漁業調整のため、許可制となった。また、翌38年(1963)には、富山県内の従来の刺し網漁船18隻がすべてカニかご漁法に転換した。そして、同41年(1966)には、富山県内のカニかご漁の漁獲量がピークとなり、1,890トンにもなった。

当時、カニかご漁法の特許を取得していれば、莫大な収入を得られたそうだが、虎松は、「自分だけがいい思いをするのではなく、みんなに教えてあげたい」と惜しげもなく広めたと言われている。昭和39年(1964)に、虎松は、富山海区漁業調整委員に選出され、昭和41年(1966)に他界するまで務めた。

虎松が考案したカニかご漁法は、昭和42年には新潟県、43年には兵庫県、44年には京都府・福井県と瞬く間に日本海側の全府県に普及した。漁業資源として利用されていなかったベニズワイガニを漁業対象とし、現在でも主要な漁法とされていることから、虎松の功績の大きさが分かる。見返りを求めず、カニかご漁の普及に尽力した一生であった。享年50歳。

〈専門員 飛弾 英樹〉

